

## 絶やさない！漁業を繋ぐ赤須賀の心意気 ～ハマグリ復活による地域の活性化～

赤須賀漁業協同組合青壮年部研究会  
秋田 健一

### 1. 地域の概要

赤須賀は、伊勢湾の最奥部、大都市名古屋から電車で20分の場所に位置する、450年前から続く漁村である(図1)。木曾三川河口の豊かな漁場で育まれたハマグリは、東海道の桑名宿の名物として名高く、江戸時代には、将軍家にも献上されていた。

湾奥の限られた漁場で漁業を継続し続けていくために、資源を守り、環境に感謝する気持ちは、脈々と引き継がれ、現在も赤須賀に息づいている。



図1 赤須賀の位置

### 2. 漁業の概要

赤須賀漁業協同組合の組合員数は現在115名で、その大半が漁業を専業としている。主な漁業はシジミ、ハマグリ、アサリを漁獲する底びき網漁業であり、このほか黒ノリ養殖とシラウオ船びき網が営まれている。

平成24年度(H24.5.1~25.4.30)の生産金額は、貝類が7億9千万円で全体の約9割以上を占めている。このほか、黒ノリが1千9百万円、シラウオが700万円となっている。

### 3. 研究グループの組織と運営

赤須賀にとって、ハマグリはかけがえのない宝であり、地区の漁業の象徴である。しかしながら、高度経済成長期の埋め立てや地盤沈下により、木曾三川河口域に広がっていた干潟のほとんどが、昭和40年代~50年代にかけて消滅し、かつて年間1,500トン程度水揚げされていたハマグリは、激減した(図2)。

このような状況の下、赤須賀の漁業とその象徴であるハマグリを絶やさないために、若手漁業者が、赤須賀漁協青壮年部研究会を昭和51年に立ち上げ、ハマグリ資源を復活させ、次世代の漁業者に繋ぐための取組を開始した。

以来、ハマグリ種苗生産、黒ノリ養殖技術改良試験、シジミ天然採苗試験、シラウオ人工ふ化試験、漁場環境調査、資源量調査など、長年にわたり様々な研究活動に取り組んで

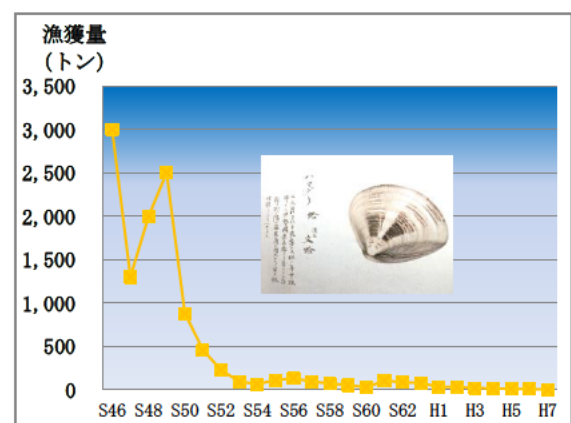


図2 ハマグリ資源量の減少

きた。現在 28 名の会員で運営されており、赤須賀の漁業の継続・発展を目的として、①将来にわたり漁業を営んでいけるよう、それぞれが自覚を持って取り組むこと。②環境保全の必要性、自然の恵みの素晴らしさを広く知ってもらい、市民との絆を深めること。をモットーに活動に取り組んでいる。

#### 4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

結成された研究会は昭和 51 年にハマグリ種苗生産・放流を開始した。全国的にほとんど事例がない中で、研究機関等の協力を得ながら技術を確認し、ほぼ毎年生産を続け、現在までに約 3,000 万個を放流した。また、地域全体で厳しい漁獲規制（週 3 日、一人 1 日 20～40 kg）に取り組み、ハマグリを取り尽くすことなく我慢したことや、平成 5 年、6 年に長良川河口堰の浚渫土砂を使った人工干潟（40 ヘクタール）が造成されたことなども追い風となって、平成 14 年、16 年にハマグリの卓越年級群が発生し、平成 24 年には年間 171 トン、2 億 5,000 万円まで水揚げが回復した（図 3）。

ハマグリの復活により収入の安定が図られ、平成 17 年以降、陸で別の仕事に就いていた 31 人が U ターンで赤須賀に戻り、漁師になった。研究会のメンバーも 20 代や 30 代の若手が増えて、活動の体制が整った（図 4、5）。赤須賀の漁業を継続するために、先輩達の努力で復活したハマグリ資源を守り、赤須賀の漁業を次の世代に繋ぐことが、これからを担う私たちの課題である。

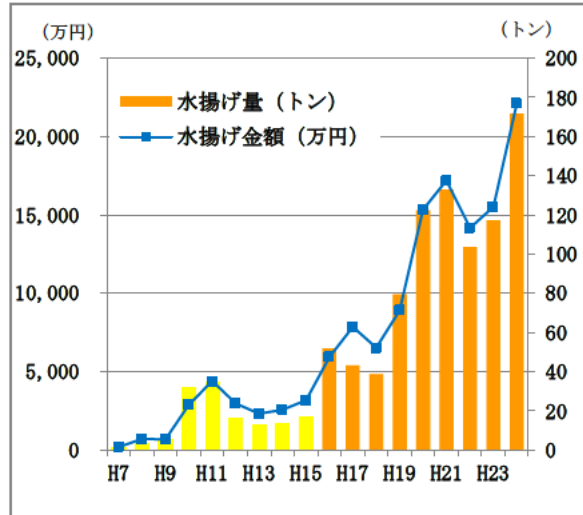


図 3 復活したハマグリ

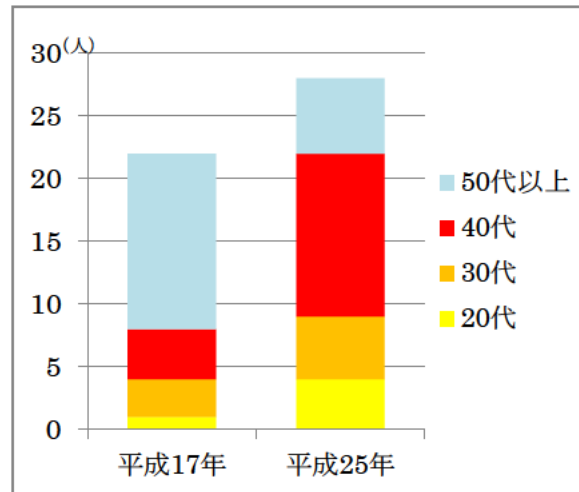


図 4 研究会の年齢構成

#### 5. 研究・実践活動状況及び成果

##### (1) ハマグリ資源を守る活動状況及び成果

###### 1) 干潟のモニタリング調査

復活したハマグリの資源管理の基礎データとするために、平成 21 年から干潟のモニタリング調査を行っている。調査項目は、貝類の生息状況、粒度組成、強熱減量で、年 2 回実施している。

表 1 に、秋の調査における 10 mm 以下のハマグリ稚貝（0 歳）の分布状況を示した。



図 5 研究会メンバー

この結果、平成 21 年と 25 年に稚貝が多く発生していることがわかった。また、それ以外の年も、ハマグリが少ない頃（昭和 61 年、平成 8 年）と比較して、10 倍以上の発生があり、卓越年級群が発生した平成 16 年以降もハマグリが安定して発生していることが明らかになった。

表 1 ハマグリ稚貝の分布状況

調査年	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年
1㎡あたりの個体数	42.0個	1.33個	7.33個	3.33個	86.0個

休日返上で暑い干潟を歩き回り、慣れない調査・分析を行うのは楽ではないが、稚貝が育っているのを自分の目で確認するのは、大変うれしい。

## 2) ハマグリ密漁対策

復活したハマグリを狙った密漁が、平成 17 年ごろから目立つようになってきた。ピーク時の平成 21 年には、春・秋の大潮時には、数千人もの密漁者が干潟でハマグリを採捕した。ちなみにここで言う密漁者には、家族連れの大潮干狩りの者も含まれるが、一人あたり 3 kg の採捕と仮定しても、1,000 人が採れば 3 トンとなり、資源に与える悪影響は計り知れない。



図 6 密漁防止パトロール

これらの密漁者からハマグリ資源を守るために、パトロールを実施している。パトロールは、春を中心に年間 20 日程度行っており、研究会のメンバーが総出で、幟を立て、密漁者にチラシを配布し、漁業権が設定されていることやハマグリ復活への努力を地道に説明している（図 6）。

これらの活動の結果、ピーク時と比較して、密漁者は着実に減ってきている。また最近では、市民や漁連、行政、海上保安部、警察などがパトロールに協力してくれるようになってきた。

## 3) ハマグリや漁業のことを市民に伝える活動

私達が守っているハマグリを密漁者が採っていくことは、言いようもないほど腹立たしい。いちごっこのような活動を続ける中で、ハマグリを守るためには、パトロールを行うだけではなく、ハマグリのことや、それを復活させた漁業者の努力などを市民に理解してもらう必要があると痛感し、ハマグリや漁業のことを市民に伝える活動に重点的に取り組んでいる。活動においては、市民と漁師が顔を合わせる大切だと考えており、できる限り赤須賀に来てもらい、赤須賀の漁業や環境を体験して頂いている。

なお、特に力を入れているのは、以下の 2 つの活動である。

### ① 次世代の子供たちに伝える

小学生達を対象とした活動では、子供達にできるだけ楽しんでもらい、漁業に興味を持ってもらうことを心がけている（図 7）。現在、ハマグリ種苗放流、干潟の観察会、操業見学、社会見学の受け入れなどを行っており、平成 21 年度～25



図 7 小学生との干潟観察会

年度の5年間で、のべ100校、4,911人に対して実施した(表2)。

私達にとって一番やりがいのある取組で、子供達からの質問に答えるのは、こちらも楽しい。これらの体験が良い思い出として残り、この中から、将来赤須賀を応援してくれる人が一人でも多く出てくれることを願っている。

表2 社会見学の受け入れ実績

社会見学	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年	合計
学校数	17校	20校	19校	22校	22校	100校
生徒数	798	977	930	1,233	973	4,911

② ハマグリの美味しさを伝える

ハマグリを知ってもらうためには、味を知ってもらうのが欠かせないと考え、ハマグリの美味しさを伝えることにも力を入れている。イベントでのハマグリ販売や親子料理教室を実施するとともに、漁場見学や干潟観察会などの際に実際にハマグリを味わってもらっている。味わってもらう際には、漁業や環境の素晴らしさを伝えることも欠かせず実施している。



図8 ハマグリフライ丼

また、ハマグリを使ったレシピの開発も行っている。ハマグリフライ丼(図8)は、私達が考案したメニューで、地区の食堂のメニューにも取り上げられて、評判である。フライの上には、地元の家庭で貝の佃煮を作る際のタレ「時雨だまり」がかかっており、口に入れると、ハマグリそのものの上品な味わいが広がる逸品である。

6. 波及効果

(1) 学校教育への波及

平成23年度から、桑名市の小学校3・4年生の社会の副読本に、赤須賀のハマグリ漁のことが取り上げられるようになった(図9)。これは、赤須賀に興味を持った先生の尽力で完成したもので、赤須賀のハマグリを守る想いが伝わった成果の一つであると考えている。また、赤須賀を訪れる学校は年間20校を超えており、そのほとんどがリピーターである。



図9 社会の副読本

(2) はまぐりプラザからの発信

平成22年に、はまぐりプラザという漁業交流センターと公民館を兼ねた施設が、赤須賀地区に完成した(図10)。この中の食堂「はまかぜ」では地元ハマグリを使った料理を提供しており、ハマグリ関連メニューを年間2,200万円

売り上げており（表3）、私達の考案した「ハマグリフライ丼」もここのメニューとして採用されている。また、展示室ではハマグリや漁業、赤須賀の漁村文化に関する展示が行われている。

この施設には、年間2万人以上の人々が訪れており、ハマグリの美味しさや漁村文化を発信する重要な拠点となっている。私達もここを使ってパネル展示や学習会などを行っている。



図10 はまぐりプラザ

表3 「はまかぜ」売り上げ実績

「はまかぜ」H24年度実績	
来客数	20,252人
ハマグリ関連メニュー売り上げ	2,200万円

## 7. 今後の課題や計画と問題点

### (1) 密漁への対応

私達の努力の結果、ピーク時と比較すれば減少しつつあるものの、悪質な密漁者は絶えることがない。今後も理解者を増やす取り組みを行うとともに、組合や漁連、行政などの協力を仰ぎながら、パトロール活動を継続しなければならない。

### (2) ハマグリや赤須賀の漁業を応援してくれる市民をさらに増やすこと

赤須賀の漁業を継続・発展させていくには、ハマグリが好きな人、赤須賀の漁業や環境に興味を持ってくれる人、いざという時に智慧を貸してくれる人など、赤須賀を応援してくれる人がまだまだ必要である。私達の手で、もっともっと増やしていきたい。

### (3) 漁業を繋ぐ「赤須賀の心意気」を絶やさないこと

ハマグリ資源が復活し、収入が安定したことで、私達は赤須賀に戻ることができた。この資源を守り、維持していくことで、漁業が守られ、漁村赤須賀が守られる。

先人達から受け継いだ、かけがえのないふるさとを守れるのは、私達だけである。漁業を繋ぐ心意気を絶やさず、これからも活動に邁進していきたい。